



TITLE:

流星課通信(2) : 東亞天文協會觀測部月報

AUTHOR(S):

宇野, 良雄

CITATION:

宇野, 良雄. 流星課通信(2) : 東亞天文協會觀測部月報. 天界 1936, 16(183): 367-368

ISSUE DATE:

1936-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167258>

RIGHT:

流星課通信 (2)

幹事 宇野良雄

(7月、8月の主な流星群の輻射點)

日	附	赤 經	赤 緯	附 近 の 星	性 質
6月—8月		333°	+28°	ペガサス座 γ	速 痕
6月—8月		303°	+23°	小 狐 座	速 短
7月中旬		317°	+41°	白 鳥 座	速
7月29日—		339°	-11°	水 瓶 座 δ	長 顯著
7月31日	輻射點移動	32°	+54°	ペルセウス座	速 痕
8月 8日		42°	+57°	”	速 痕
8月12日		46°	+57°	”	速 痕 顯著
8月16日		52°	+58°	”	速 痕
8月—9月		546°	0°	魚 座 γ	緩
6月—8月		310°	+61°	セフエ座 η	速
8月中旬—下旬		290°	+53°	白 鳥 座 κ	速

(7月、8月の近畿流星協同觀測時間表)

日 月	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
7月	—	—	—	C	C	C	C	C	C	D	D	D	A	A	A	B	B	B	B	B	B	B	B	—
8月	—	—	C	C	C	C	C	D	D	D	D	A	A	A	A	B	B	B	B	B	B	—	—	—

觀測時間 A=21時—23時及び1時—3時 B=1時—3時

C=21時—23時 D=1時—3時及び21時—23時

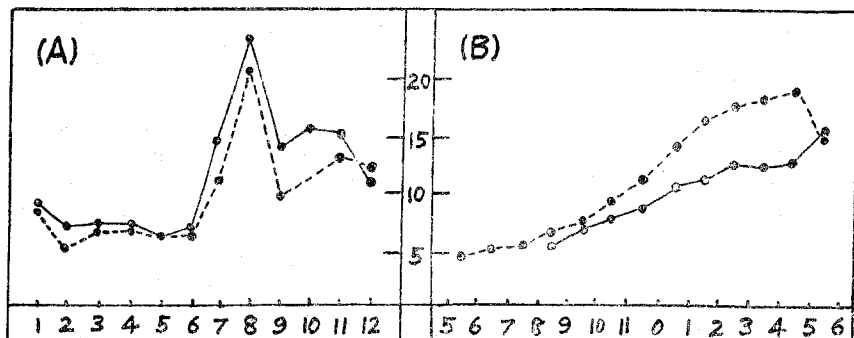
觀測方向 和歌山=東北 神戸, 大阪=東 京都=東南 名古屋=西南

流星シーズン来る 流星は1年を通じ又は1日を通じ同じ状態で出現せず、月により又時刻によりその出現に甚だしい差がある。下圖は (A) 各月の毎時流星出現數、(B) 1ヶ年平均の夕方より夜明まで各時間に於ける流星出現數である。圖により直ちに解る様に1年中では前半より後半の方が斷然出現多く、8月が1年中で最も多い。これは前半年に比して後半年に著しい流星群が多い爲である。8月には1ヶ月に涉つて出現する有名なペルセウス座流星群がある。又1日中でいへば夜半前より夜半後の方が出現多く、夕方より夜半を過ぎ明方に進むに従ひ漸次出現數の増加する事が圖によつて知られる。こ

れは明方には觀測地點が地球の進行する前面の方向に當つて居り、夕方にはその反對の方を向いてゐるために、正面より衝突する流星の方が、背面より追突するものより多いためである。理論上からは午前6時が最も多く出現する筈であるが、薄明其他の關係から減少する様に見える。

(月別毎時出現數)

(時間別毎時出現數)



シュミット・デニング・ホフマイスタールの觀測より求めた數字 (流星の研究より)

梅雨も明けて快晴の夜が續き、納涼の床机で天文の話が出たり、大火球が認められたりして、一般人に天文と流星が最も接近する時季である。觀測は樂になり出現數も多く、毎年夏には新しい流星群が発見される事が多い。近畿流星協同觀測も愈々本舞臺に上る。各員の熱心な觀測が望まれる。

流星觀測を奨む

流星觀測は實地天文學の第1歩。

流星天文學は素人に殘された唯一の研究部門。

流星觀測には機械を要しない。従つて他の觀測部門の如く機械の性能によつて觀測を左右せられない。熱心と熟練によつて誰でも一流の觀測者となり得る。

時季は流星シーズン。觀測を初めるに最もよき時、君よ觀測せずや。

觀測者には參考圖書を呈し、觀測研究の指導をなす。申込は下記へ

課長 小槇孝二郎

和歌山縣有田郡金星525

幹事 宇野 良雄

京都市上京區紫野宮西町13

(觀測部流星課)